
繁栄の紡ぎ手

若桜モドキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

繁栄の紡ぎ手

【Nコード】

N7785X

【作者名】

若桜モドキ

【あらすじ】

その日、彼らはついに見つけた。

彼らを守護し、永久に守り、果てぬ繁栄を約束する——神を。

（倉庫のような自サイトにもありません）

その日、彼らはついに見つけた。

はるか古の時代から伝えられる伝説の兵器。

ヒトと似た容姿を持ちながらも、見上げてもてっぺんが見えない山のように巨大な姿。

そして彼らが持つ数多の武器が通じない強固な肉体。

まさに伝説に記されたままの存在がそこにいる。

その日、彼らはついに見つける事ができた。最初に探し出した頃に子供だった者の大半がすでにこの世を去って、彼らの孫が老人と呼ばれるような年齢に達するほどの長い時間。

自分達の滅亡さえ招きかねない賭けに、彼らはついに勝ったのだ。彼らを守護し、永久に守り、果てぬ繁栄を約束する——神を。

草原の中に小さな集落があった。

その傍らには力なく座り込んだ、けれど山のように大きな何かがあった。

それはまるでヒトのような姿形をしていたが、発見した集落にあるどんな武器も太刀打ちできないほど硬く、それは不気味にも感じられる沈黙をひたすら守っていた。

神の発見から数年経ち、当時子供だったモノ達が大人になった。あれから幾度と無く神の発見を祝う祭りが盛大に行われ、神にはありとあらゆるものが奉げられた。

まずは食料。毎日、その日の狩りでしとめた中で一番の獲物を、数人の神官が祈祷して清めた道具と水を使って解体し、もつとも美味とされる部分を神の御前に奉げた。

けれど神は一言も発さない。まるでそう、死んでしまったかのように、彼らが流浪の果てに辿り着いた神はひたすらに沈黙を守り続けていた。

ある日、一人の娘が神の御前に参じ、舞いを奉納していた。右へ、左へ、娘は空を飛ぶ鳥のように舞い踊る。仲間の誰よりも美しい演舞を舞う彼女は、ふいに神が身じろぐのを見た。

——始めまして、美しい娘。

神はゆっくりと穏やかな口調で、笑うように娘に語りかけた。娘は一瞬驚いて何もいえなくなってしまうたが、すぐににこりと微笑みを返した。そして神はゆっくりと立ち上がった。

ついに神が話された。そのお声を聞かせてくださった。彼らは大騒ぎした。これとこしえの繁栄が約束された。もう飢える事も殺される事も無いのだと狂喜する。

けれど肝心の神は困惑した声で語った。

——始めまして、『小さなヒト』。けれどわたしは神ではない。

ならばあなたは何者なのかと彼らは問うた。

——わたしは、さらに大きなヒトに創られた。とてもとても昔。もしも神がいるとしたならばそれはわたしではないだろう。それはきつとわたしを創り出したモノ達だ。何者かに作り出されたわたしは神ではない。そんな素晴らしい存在になどなれるはずが無いのだ。しかし、と彼らはさらに問いかける。

あなたの身体は我らの武器さえ通用しない。そんなはるかに優れた存在を、神と呼べないと言うのならば我らは貴方の事を何と呼べばいいのだろう。嘆くように彼らは問うた。

さらに困惑した声で、神は答える。

——それでもわたしは神ではないのだ。わたしもまた『武器』として作られた。遠い昔はわたしでさえ太刀打ちできない武器があった。それゆえに、わたしはこうして此処にいた。

しかし、と神は続けた。

——もしも新たな役目を与えられるなら、わたしはそなたらと共に行きたい。神になる事はできないと思うが、共に生きる事を許してはもらえないだろうか、『小さいヒト』よ。この通り姿形は似ているが違う。それでもわたしはそなたらと共に、『今』を生きていきたいのだ。

その申し出に『小さいヒト』はとても喜んだ。彼らは自分達が神だと思ったその事を『大きなヒト』と呼ぶ事にして、新たな仲間の一員として、対等な存在として温かく迎え入れた。

その夜、集落では祭りが行われた。

はしゃぐ子供達の中心にいるのは『大きなヒト』。

大人はそれを見ていた。これはこれで悪くないという表情で見えていた。

次の日から『大きいヒト』はいろんな事を語り聞かせた。

彼らの先祖がまだ大きな集落——国という集団を創っていた時代の話だった。その時代、『大きいヒト』は珍しくも無く、どこにでもいる獣のようにありふれた存在だったという。

当時の『小さいヒト』は『大きいヒト』やその仲間を使役し、始まりを思うと気が遠くなるほど長く続く繁栄を謳歌していた。その原動力は『大きいヒト』で、本人が言うように主な用途は武器としてだった。長い繁栄は同時に敵を多く作ったと、『大きいヒト』は言う。

その敵を屠るために『大きいヒト』は創られた。だから『小さいヒト』の武器は通じないのだと語り聞かせた。想像すらない話に『小さいヒト』は驚きながらも、興味津々だった。

話の中で『小さいヒト』が一番興味を示したのは、遠い先祖の暮らしぶり。自分達は食料を得るために旅を続け、季節によっては農業もする。だが危険な狩りをする事が一番多い。

けれど古の時代はどうだったのか。それが気になって仕方が無い様子だった。

——当時の『小さいヒト』は狩りなどしなかった。少なくとも食料を得るという理由での狩りは無かった。それは絵を描き、歌を奏でるような、それは趣味と呼ばれる作業だった。

ならば食料はどうやって得ていたのかと、『小さなヒト』は問う。
——貨幣という制度があつた時代にはあつた。物々交換のようなものだ。それと食料を交換していたのだ。だから食料を提供する人々もいて、だから食べ物を得るのには困らない。ただ貨幣を得るために働かなければならなかった。歌や舞いを職業とする者もいた。

そんな世界があつたのかと、『小さなヒト』は驚いた。便利そう
だと言うモノもいたが、今の自分達に同じ事をするだけの技術が無

い事はわかっていたし、意味も無かった。

けれど諦めたわけではなかった。いつか自分達も同じ事をしたい。狩りをする必要が無い世界を生み出したい。そうなったらどれだけ幸せなのだろうと、『小さいヒト』は思った。

季節ごとに旅を繰り返す落ち着かない生活から開放されるというだけで、そんな生活に疲れ果てていた彼らにとっては天国のようだった。

——けれど、その生活を保つためには他者から搾取する必要もあった。それによりたびたびと言うにはあまりにも多い頻度で、何度も何度も争いが起こり、絶えなかった。その果てにわたしのような武器を生み出したのだろうと思う。

さらに『大きいヒト』は続けた。

——繁栄の裏側には必ず影の部分があるのだ。それは慢心という心の油断。あるいは自らを過大評価するような。それらは常に身を滅ぼすのだろう。だから過去は過去となった。

それはまるで戒めるような言葉で、『小さいヒト』は無言で頷いた。

確かに狩りも旅もない日々は今よりは幸せかもしれない。

けれどそんな時代が彼方に遠ざかった『過去』になってしまっているからには、それは想像を絶するような駆け引きや、気が狂うようなバランスが求められる『生き方』だったのだろう。

——しかしそなたらは大丈夫だ、『小さいヒト』よ。そなたらは自らを律する強くたくましく心が備わっている。それにそのような震えて恐れる事など何も無いのだ。なぜなら過去は過去でしか無い。学ぶものは多いだろうが、囚われる必要などどこにも存在しないのだから。

優しい声で『大きいヒト』は言う。励ますように笑う。

——だから我らは我らの日々を。過去に負けぬ、けれど過去とは違う日々を送ろう。

その後も『大きいヒト』はたくさん話を、ところどころ曖昧に

なつた記憶を何とか思い出しながら『小さいヒト』に聞かせた。乞われるまま、望まれるままに語り聞かせた。

もう覚えている事はない、もう話し聞かせられるような事はないと『大きい人』が残念そうに言うのは、そう遠くない未来だった。

そして『小さいヒト』は、ふとした時に思いを馳せる。

遠い古の時代。自分達の先祖が『繁栄』を手にしていた時代に。

草原に春が来ていた。あちらこちらに花が咲き乱れ、娘達は少し遠くの花畑に薬草を採りに行きたいといい、畑仕事の合間に『大きいヒト』を誘って出かけていた。

娘達を肩に乗せ、『大きいヒト』はぐんぐんと進む。

かつて彼らが暮らしていた別の草原にはたくさん薬草が生えていて、しかし神を探すたびのために離れてしまったと娘達は言った。山を二つほど越えると『大きいヒト』と、その肩に乗った娘の目に花が咲き乱れた広い野原が飛び込んできた。

この地で暮らしていたのか娘達の祖母が、まだ娘だった頃の話になる。だから誰一人として見た事が無い目的地だったが、ひと目見た瞬間にこの地がそうなのだと誰もが思った。

さっそく野原に降り立った娘達は、薬草を取りつつ花を手折り、髪飾りにして見たり編んで冠を作ったりしていた。そんな光景を『大きいヒト』は満足そうに眺めていた。

帰るのはお昼過ぎにお弁当を食べてから。しばらくしてから娘の一人がそう言い、それまではのんびりと作業をしつつ遊ぶ事になったようだった。

反対する娘はおらず、『大きいヒト』にも反対する理由は無いため、それを了承した。

こうして夕方ぶりにのんびりとした時間を過ごす。

——この時代はなんと穏やかな事か。あの醜い争いも無く、けれど寂しくも無い。全てが足りないという事も無く、在りすぎるという事もなく。ああ、此処は美しく整えられた世界だ。

そして『大きいヒト』は語りだす。

ずっと考えていた、記憶していた忌まわしい過去の一片を。

彼らと会う前までの記憶だが、実はその大半が判読不能なほどに破損している、と『大きいヒト』は言った。わずかに覚えているの

は赤色。自らが壊した命が流した真つ赤な体液。

命令に従ってどれほどの命を散らせたか、『大きいヒト』は覚えていない。今となれば記憶していなくてよかったと思えるのだが、それでも時折、忘れてしまった事を悔いる事もあった。

そのどちらも本心。過去を忘れてよかったと思う心、忘れてしまった事を悔いる心。どちらともが『大きいヒト』にとっての過去に関わるモノ全てであり、優劣など決められぬのだ。

かつて数多の命で真紅に染まった手を見つめながら、『大きいヒト』は呟く。

——確かに過去は滅んでしまった。たくさんの命が消えた。世界は『繁栄』から遠ざかってしまったし、文明や技術など見る影も無い。だが、だかしかし、それでもこの世界はこんなにも温かく満たされている。あの時代は、この世界に至るための犠牲だったのかも知れぬ。

それから今の自分を考える。たくさんの『小さいヒト』に混じって畑を耕し、なれぬ手つきで野菜などを収穫する。毎日が似たようなスケジュールで動き、けれど飽きる事は無い。

同じ『変わらない日々』でも昔とは違う、と『大きいヒト』は言う。

——田畑での作業は心地よい。同じ事を繰り返すのも、まったく苦ではない。自分にそんな感覚が備わっていた事など知らなかった。今、初めて創ってくれた何者かにわたしは感謝する。

とても嬉しそうな声で『大きいヒト』は笑った。その姿があまりにも嬉しそうで、とても幸せそうだったものだから、つられるようにして娘も笑った。

ああ、こんな日々がもつと続けばいい。

ぼんやりと『大きいヒト』は思っていた。

思いながら、当然これからも続くものと信じていた。

それは寒い冬の日。いつものように畑仕事を開始した『大きいヒト』は、雪の中でたった一人特製のクワで広い田畑を耕していた。一緒に働く『小さいヒト』はまだ寝ていた。

こういう寒い時期にはいつもの事なのだが、最近は昼になってようやく畑に来るようになった気がする。いや、それは気のせいだと『大きいヒト』は自分に言った。

それではまるで仲間が怠けていると言わんばかりではないかと、そんな事は仲間に対して失礼にも程がある考えだと、数回強く自分の顔をばんばんと音を立てて殴った。

痛みなど無い。自分は武器だ。兵器だ。痛みなどありえない。

ただ、こうするとたるんでいた気持ちぐつと引き締まるのだと、ずっと昔に共に働いていた一人の『小さいヒト』が言ったから、同じ事をしていたから、それを真似ているだけだ。

しかしこうしていると、どうでもいい、どうにもならない事ばかり考えてしまう。

かつては有り余っていたという鉄やら鋼やら、その時代に手に入る事ができたありとあらゆる金属を使って、なおかつ緻密な計算と技術を集めて創られた、この巨大で強固な身体。

その動き方や姿形は『小さいヒト』と変わらない。同じように腕や足が曲がって動く。

けれど中身は別物だから。彼らのように暑くたぎった体液はどこにも無く、からっぽな身体の中でのた打ち回りうごめくのは彼らの胴体よりも太い配線。

見た目は同じ、けれど中身は別物。

別のイキモノなのだ。

——いや、違う。見た目などどうでもいいのだ。我らは仲間。これまでこれからも共に生きるかけがえの無い大切な仲間。そのの

何に、どこに不満があるというのだ、わたしよ。

大きな音で呟く。そうだと何をもそんなに求めるのか。今以上な
どあるのか。

不満なのか。今いる仲間がそんなにも煩わしいのか。

必要ないのか、一人がいいのか。何度も叱責するとくだらない考
えは消えた。

——さあ、今日も働こう。

自分を叱りつけて、『大きいヒト』は大きくクワを振り上げる。

冬の土は中の水分が凍ってしまっているのだろうか、とても硬くて
柔らかくするのに時間がかかる。何度も何度も、力いっぱい二クワ
を振り上げては、思い切りそれを振り下ろす。

そのたびに集落がかすかに揺れる。そして一人の『小さいヒト』
が外へ出てくる。

少し静かにしてくれ、と困り顔で言われた。いや、怒鳴られた。

最後にもう一度、静かにしろと吐き捨てるように言って『小さい
ヒト』は家の中へ。

ぼつん、と残された『大きいヒト』。言われた通りに今度は優し
く、丁寧に、なるべく音を立てないように土を耕した。そそくさと
家の中に入ってしまった『小さいヒト』は、結局今日もお昼過ぎにな
って温かくなるまで一人も出て来る事は無かった。

思えば自分はいつも一人だ。ここ最近はずっと一人だ。昔は談笑
しながら作業するのが当たり前だったような。けれど最近、誰かと
話したという記憶が『大きいヒト』には無かった。

どうしてだろうと考える。何かが変わだとも感じる。

ただ与えられた畑を耕すという仕事を、役割を果たしていただけ
なのに。失敗しているわけでもないだろうし、今日みたいな事もそ
んなにあるわけではない。

何かがおかしいと思う。思うのだけれども『大きいヒト』はどこ
がおかしいのか、何をおかしいと感じたのかわからない。必死に
記憶を逆に回す、回し続ける。

けれども手がかりさえ見つからなかった。はたして自分が何を疑問に思ったのだろう。

それに気付いたら壊れてしまっ気がしていた。

何かが。壊れてしまう。

そんな予感が在った。

何十回目かの春が来た。

いや夏か、秋か、冬か……それとも違う季節なのか。

季節などもう『大きいヒト』にはどうでもいい事となっていた。

むしろ自動的にこなす仕事を、天候などの差で乱す邪魔な存在と化していた。

今日も『大きい人』は田畑を耕す。あまりにも小さな実を大きな手で丁寧に収穫する。

もうどれくらい昔から、これを毎日繰り返しただろう。

今日も畑のそばにある集落からは『小さいヒト』の楽しげな声が聞こえ、若い娘達が優美な舞いを拾うし、それにあわせて若い男が楽器をかき鳴らしていた。

初めて『小さいヒト』と暮らし始めた頃はずいぶんよってきた子供達だが、今はまるで興味を示す事は無い。いつのまにか『大きいヒト』という存在は、風景にも等しくなっていた。

とりあえずそこにいる。とりあえずそこに在る。それ以上でも以下でもない。

在るというにはあまりにも空虚な存在と化していた。そして、自分の置かれた立場の異変を知り始めた頃から、『大きいヒト』は出口の無い物思いを繰り返すようになっていた。

最初こそ出口など見えない。けれど何度も繰り返せば、例えそれが勘違いであっても出口らしきものはいずれ見えてくるもので。ついに『大きいヒト』も出口の傍まで来ていた。

——違うのか。もう違ってしまったのか。わからぬ、何もわからぬ。どこで我々がズレてしまったのかわからぬ。あの頃に見た未来は、ただのまやかしかったのか。いや、そんな事は無かったはずだ。あの時は確かに、我々は『仲間』となつたはず。そうだとともに違う。違くない。

クワを地面に突き刺す。傍目には休憩に見える。そのわずかな間に、『大きいヒト』は混乱しつつある自分を何とかするために、とにかく落ち着くように言い聞かせようとした。

けれど心に向き合えば向き合うほど、考えを動かせば動かすほどに。

湧き上がってくるのは疑念。そして悲しみと怒りだった。

——だが何ゆえだ。例えそうだとしても、例えそうだったとしたならば。どうしてもあまりに寂しく静かで冷たいこの場所に、わたしはたった一人でいるのだ。他の仲間はどこに、どこに行ってしまったのだ。ああ、まるで『違う』ではないか。何もかもが『違う』ではないか。

ぐるりぐるりと回るだけの自問自答が続く。

ちらりと見た集落。自分が去っても気付かなさそうな世界。見ているだけで虚しく、どうしても彼らと共に生きる事を選んだのか、忘れてはいけないのに忘れてしまいそうになっていく。

誰も気が付かないズレが、そのたびに大きくなった。

そう、誰も気づくはずがない。誰もが、そう本人でさえ思っていた。

それは『大きいヒト』と名付けられたそれは常に『使役される』存在で、神でもなければ本来は対等ですらないと。誰一人として気づかないが、誰もが気づき始めていたのだった。

——そうか、そうか、そういう事か。わたしはなんと愚かだったのだろう。結局、わたしはどれほどの時間を越えても『使われる』存在。ヒトと同じにはなれぬ。その証拠がかつての仲間たちの姿ではないか。あれを対等と、仲間と呼べるはずが無い、呼ぶ事などできはしない。

ついに『大きいヒト』が気づき、その瞬間に何もかもが夢のように砕け散った。

——なぜだ！

唐突に響き渡り、木々を、水面を、大地を揺らす音。

それは、むせび泣くような絶叫だった。

絶叫にして、嘆きだった。

その衝撃に『小さいヒト』の多くが地面を転がり、倒れ、突然の事に彼らは戸惑う。

しかし、すでにもう終わっていた。何もかもが終わっていた。

——どうしてだ、どうしてなのだ。あの時は、そう知り合ったあの時には。こんな未来など微塵も推測できなかった、可能性さえ見当たらなかったはずなのに、なぜだ！

大地を揺らし、『大きいヒト』は嘆いた。目を覚ましたあの時に描いた新しい人生を打ち壊された絶望と怒りに身を委ね、まるでかつての『小さいヒト』のように荒れ狂った。

荒れ狂う姿を恐れた『小さいヒト』は、かつてのように神と呼んで必死に祈りを捧げた。

身のうちから際限なく湧き上がる怒りを振りまき、それでいて強きものにひれ伏すことしかできない、あまりにも弱い『小さいヒト』を哀れむように、『大きいヒト』は叫ぶ。

——我らは常に対等な関係なのだ信じていたのに。上下関係など無いと、そう思ってくれていると信じていたのに。またもわたしを神と呼ぶのか、神と呼び蔑むのか貴様らは！

それでも『小さいヒト』は祈るのをやめなかった。それはまるで命乞いのようで、そう思った瞬間に『大きいヒト』の中から迷いも、彼らとの幸せな思い出も消え去ってしまった。

——今更、神と崇められてもその言葉に意味は無い。もうわたしは終わった。わたしのすべては終わってしまったのだ。これ以上、わたしという存在を穢すな！

一度激しく火が付いた思いは、そして暴れ狂ったその心は、聞きなれた声の叫びが上がるうとも止まらない。幾重にも重なる悲鳴の演奏会。それに合わせて舞うのは娘ではなかった。

地面を揺らし踏み荒らす。かつて自分が整えた集落の広場を。手当たり次第に叩き壊した。かつて自分が作った家を。

掴んでは千切り捨てた。かつて対等だと信じた『小さいヒト』を。そうして狂乱の一夜が過ぎて、残されたのは泣くように咆哮する『大きいヒト』と、荒れ果てた田畑や家屋、そして四肢を引き千切られ肉塊と化した『小さいヒト』だった。

一人になった『大きなヒト』は、足元に子供が転がっているのに気が付いた。それは自分に舞を見せてくれたあの娘によく似た、彼女の孫に当たる少女だった。

少女は泣いた。母を、祖母を、家族を求めて泣いた。けれどもそれは『大きいヒト』が踏み荒らした一面の赤い肉塊に埋もれて消えて、その残滓さえ見つかるとは思えなかった。

少女は泣いた。泣いて泣いて、飢えて死ぬまで泣き続けた。

そんな光景を『大きいヒト』は黙ってみていた。救う事も無く、かといって一思いに楽にする事もしないまま、風景を眺めるように物思いに耽るように、小さな命が散るのを見ていた。

泣き声が聞こえなくなってから、『大きいヒト』はついに動き出す。

ゆつくりと、地面をかすかに揺らしながら、ひたすら前を目指して進んでいった。

そしてその姿は山の向こう側へと消えてしまい、残されたのは腐りかけるか獣に食い荒らされた死肉だけだった。それさえもあつという間に消えて、集落は跡形も無く消えた。

それから『大きいヒト』がどこへ行ったのか。

記し伝えるモノはいない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7785x/>

繁栄の紡ぎ手

2011年10月22日03時28分発行